

## 朝さろんの本棚 〈51〉

### 筒井康隆 『エディプスの恋人』 について

51st morning:2015年9月10日(木)@渋谷

参加者:7名

『エディプスの恋人』は、一度は死んだ七瀬が復活する“原理”としての存在を考察しつつ、女性原理と男性原理の相克や虚構人物における自意識などの哲学的探求をエンタメとして描いた作品。

#### 【テーマ】

##### 〈ヒトの心理とエゴを“読む”(3)完〉

- ⇒ 筒井康隆の七瀬三部作を順に読み解いていきます。七瀬シリーズでは、三部作を通じて“自分とは何か？”という問いが投げかけられることとなります。“SF”だからこそできる仕掛けにも注目しながら、永久不変の“自分とは何か？”という問いかけについて考察してもらえると、より一層楽しめるかと思います。今シーズンを通じて新しく考えてみようと思うのは、例えばこんなことです。
- ◇なぜ70年頃に、文学界で(大衆作家も純文学作家も)SFというジャンルがこれだけ力を持っていたのか？ 時代状況ともオーヴァラップさせながら、SFという方法論の持つ力(特徴)についても考えてみたい。
- ◇主人公は同じでも、三部作のなかでテーマや手法がどんどん進化していきます。それを丁寧に確認してみましょう。そのようなテーマや手法が、作品内容とどう結びついているのか、そこにどんな必然があるのか、考えてみたいと思います。

#### 【本】

『エディプスの恋人』 筒井康隆 (新潮社、1977) 文庫本:新潮文庫(1981)  
「週刊読売」1977年1月1日号から6月4号にかけて全22回連載

#### 【筒井康隆】

1934(昭和9)年、大阪市生れ。同志社大学卒。1960年、第3人とSF同人誌〈NULL〉を創刊。この雑誌が江戸川乱歩に認められ「お助け」が〈宝石〉に転載される。1965年、処女作品集『東海道戦争』を刊行。1981年、『虚人たち』で泉鏡花文学賞、1987年、『夢の木坂分岐点』で谷崎潤一郎賞、1989(平成元)年、「ヨッパ谷への降下」で川端康成文学賞、1992年、『朝のガスパール』で日本SF大賞をそれぞれ受賞。1996年12月、3年3カ月に及んだ断筆を解除。1997年、パブリック賞受賞。2000年、『わたしのグランパ』で読売文学賞を受賞。2002年、紫綬褒章受章。2010年、菊池寛賞受賞。他に『家族八景』『敵』『銀齡の果て』『ダンシング・ヴァニティ』『アホの壁』『現代語裏辞典』など著書多数。2015年、最新長編『モナドの領域』を発表。

## 【ストーリー】

七瀬はとある名門私立高校の事務職員として働く23歳。ある日七瀬は不思議な光景を目にする。七瀬はそれが「彼」の意志によるものではなく、何者かが彼を守ろうとして行ったことではないかと推測する。果たしてそんなことが可能なのか…。彼女が知るとの超能力を使っても不可能に思えるその力に、七瀬は段々と脅威を感じ始める。そして次第に、何者かが自分の精神さえも操っているのではないかと考えるに至る。なんと智広は現在の宇宙意志を司るものの息子だった。「彼女」はもともとは人間だったが、その精神を買われて宇宙意志を司るもの一人として神に選ばれ、現在は宇宙の全権を握る絶対的な存在となっていた。母親はその力を使い、息子を遠くから守っていた。そして七瀬はその母親に、恋人役として選ばれた人物だった。その日、智広の求めに応じて関係を結ぶ七瀬だったが、その最中に精神を飛ばされて肉体を奪われる。「彼女」は七瀬の肉体を使って「彼」と交わろうとしていたのだった。

すべては絶対者によって用意されていたことだと気付いた七瀬は、その力に愕然とする。ではどこからが彼女の力なのか、自分の記憶はどこまでが正しいのか。あの事件で致命傷を負った七瀬を助けたのも絶対者だったということになるがその記憶も嘘なのか…。そこまで考えて七瀬は考えることを放棄し、あとは終わらせようと考えようになった。相手が絶対者である限り、どうしようもないと悟ったゆえに。そして七瀬は智広の待つ自宅へと静かに歩き始めた。

## 【お題】作品を読んで次の問いについて考えてみましょう

1): 本作の感想を「キーワードを三つ」を交えて教えてください。

本作『エディプスの恋人』には、シーズン1回目の『家族八景』から伏線的に発展している要素もあります。前回々々のレジュメも参考に、ほかの二作品との「共通点」や「相違点」などにも目を向けてもらえるとさいわいです。本作の疑問点や「ここをじっくり読み解きたい」と感じた箇所など、感想と併せてシェアしてみてください。

### ● < (意志の) 大きさ > < (七瀬の) 運命 > < (宇宙の) 太極 >

「彼女」と七瀬の意志のサイズの違いや、宇宙の存在などに興味を覚えた

### ● < 処女信仰 > < 神の前の実存 > < 欲望の確信 >

男性作家ゆえなのか、処女信仰がうかがえた。ラストでの七瀬の性交渉シーンの回避など。

### ● < ぎらぎらした男たち > < 聖と俗 > < 具象性と超越性 >

俗っぽい要素を徹底的に突き詰めていくと、ふと聖性を帯びるようなところがあるのでは？

### ● < 不条理 > < 恋 > < 母 >

不条理に見える点も多いなかで、恋を“させられる”点や、母の存在が気になった。

### ● < 女 > < 必然 > < 意志 >

前二作と異なり、本作での七瀬は超能力者でありながらまるでふつうの人間のように見える

2): 三部作のなかから「朝さろん文学賞」を選びましょう。

三部作を読み解いてきたので、その中から受賞作を一冊、全参加者で選びたいと思います。参加者の皆さんには朝さろん文学賞の選考委員になっていただき、“直木賞選考会形式”で対話を進めます。『家族八景』『七瀬ふたたび』『エディプスの恋人』の三作品それぞれについて、「○(1点)」「△(0.5点)」「×(否定)あるいは無評価(0点)」で最初に票を出していただき、それらの集計結果を見たところから、選考会をスタートします。選考委員の皆さまには、ぜひご自身の推薦する作品が受賞されるように情熱的にプッシュしていただきたいと思います。対話の最後に再度、最終投票を行い、最も得票数の多い作品が「朝さろん文学賞」受賞作となります。もちろん「どの作品も受賞に値しない！だって～だから」とご自身の文学観を元に鋭い指摘をしていただいても大歓迎です。

<候補作>

『家族八景』	○△△×○=3点
『七瀬ふたたび』	○×○△×=2,5点
『エディプスの恋人』	△△△△○=3点

- 「家族八景」は七瀬が主人公でありながら、観察者というポジションで冷静な観察をしているところが他二作と異なり、ひと際面白かった。平凡な家庭のなかにいかに巧妙にドラマが隠されているかということ、想像力を駆使して示した。
- 氏の文章には硬い筆致と軟かい筆致が急に混じって転調するようなどころがあり、乱れを覚える。その中であっては「エディプスの恋人」が一步ましかと思った。七瀬という女性主人公の語りの文章として違和感を覚えるシーンが散見された。
- 「エディプスの恋人」は起承転結というような四部の構成と見て取れ、それぞれ、ミステリ、ラブストーリー、解決編、芝居という違った要素が盛り込まれていて技術的にも一段高いと考えられる。
- 「七瀬ふたたび」にはスリラー(エスピオナーージュ)的な要素が認められるが、特に時間旅行者という能力者を登場させ、彼女が自身の持つ能力ゆえに“必然的に”苦悩しなければならなくなった並行宇宙(次元)の問題など、SF的な要素を話の筋に無理なく盛り込んでいる。哲学的な問題を探求しているという点でも、他作品より一步進んでいる。SFが力をもっていた当時の状況を、説得力を持って表現できている。
- 「家族八景」でこそ、七瀬のテレパスという能力が、文学作品として最大の効果を上げられているのではないかと。また八つの異なる家庭というヴァリエーションを示した力量も評価したい。
- 「エディプスの恋人」が描かれた社会背景として、男性優位社会の変化(崩壊)があり、母親が教育ママ化していく様子などが先取的かつアイロニカルに描かれている。ここに登場する「彼女」は、今でいう“毒親”そのものであって、現代にもつながる社会問題の萌芽を描いているという点を、今回の再読で発見した。この点を評価したい。

⇒作品の議論の後、最終投票を行い、受賞作は『家族八景』と決まりました。

【解題】 『エディプスの恋人』という作品について

●第1作『家族八景』各編からのつながり

	タイトル	あらすじ	七瀬の動向
3	青春讃歌	若作りに勤しむ妻と、それを情けない行為だと罵る夫。二人の口論は苛烈さを増し、冷徹な夫の言葉が妻の心を深く傷つける。翌日、スポーツカーを高速道路で走らせる妻の意識を、七瀬はテレパスで追っていたが… …。	〈家〉に使える家政婦という立場でありながら、自分の感情に捕らわれてしまい妻の側に加担してしまう。それが、妻が事故で死亡する結果を招く遠因となってしまう。七瀬はその死の瞬間をテレパスし、死の瞬間を追体験するという罰(?)を味わった。  〈七瀬は寿郎の抱いている <u>強烈なエディプス・コンプレックス</u> に気が付いた〉〈寿郎が、それほど「中年にふさわしい服装」にこだわる裏には、陽子に対する批判の裏づけといった理由以外の <u>潜在意識</u> が何らかの形で働いている筈だった〉。
8	亡母渴望	母の葬儀の場で、息子は年甲斐もなく咽び泣き、弔問客の失笑を買っていた。彼女の病床の世話をしていた七瀬も葬儀に参列していたが、葬儀中、誰のものとも知れない『呪いの声』を耳にする。	〈常に彼をなぐさめ、彼に自信を植えつけてくれた恒子は、 <u>信太郎にとって彼の自我の一部であり、超自我でもあった</u> 〉という設定が登場。〈 <u>あなたが死なない限り息子さんは駄目になるのよ</u> 〉(死んであげて)(息子さんのために)(死んであげて)。  〈なんのために今まで精神感應能力をひた隠しにしてきたの〉〈わたしは知らない、わたしは何も知らないのだ〉。〈 <u>自分の身を守るために生きている人間を見殺しにするという大それた行為への罪悪感</u> は、彼女の心から消えることがない筈だった。心には <u>神を持たない七瀬</u> だったが、 <u>自らが神にかわるほどの存在でないことはわかっていた</u> 〉。  自分しか彼女を救えないという倫理的葛藤。しかし自分の防衛・生存を選択する。

⇒八つの家庭の個性的な問題を観察したり、巻き込まれたりする七瀬という表面的なストーリーを縦軸に、連作を通して年齢的・肉体的に成長していき、能力者としての様々な試練や葛藤を経験していく様子が、本作の横軸となって展開していくのが本作の特徴と言える。

⇒作中では、テレパス能力の行使は倫理的にどう許容できるか、原理的には倫理に反するはずの殺人(抹殺)が、それでもなお能力の行使が許されるとするならばそのときの「条件」とはなにか、という問題を投げかけられる。単に超現実的な能力が描かれるだけでなく、そのような能力が存在する時に生じるであろう諸問題が見過ごされることなく、丁寧に煩悶される作品でもある。

#### ◇第三作『エディプスの恋人』との関連

「青春賛歌」と「亡母渴仰」の二編には〈エディプス・コンプレックス〉が共通するモチーフとして登場する。このモチーフは、より根源的な問いと共に、第三作「エディプスの恋人」において反復的に物語られることへと繋がっていく。

### ●『エディプスの恋人』のモチーフについて

#### 1)；前作での“七瀬の死”と、その克服

前作『七瀬ふたたび』の結末で七瀬は命を落とした。再び七瀬を登場させるためには、その結末を“なかったこと”にしなければならない。この改変をするために必要なものとして「神」の存在、そして復活が想起された可能性は想像に難くない。それゆえ、本作には神の存在をめぐる哲学的考察が含まれる余地がそもそもあった、と考えられる。同時に、七瀬の復活があくまで作者の都合や読者の要請によるものであり、その恣意性が本作に登場する「彼女」の独善的なふるまいにパロディ化されて仮託されているとも読める。

#### 2)；男性原理から女性原理へという変化

作中での“創世記”のくだり(p218-239)では、興味深い宇宙観が語られている。〈宇宙の秩序は単一の宇宙意志によって保たれてきた〉。それは〈長い年月太極に存在したための必然からか、あきらかに男性のものであった〉らしい。ところが〈超絶対者としての男性的な論理によって司られていた秩序が、まさにそれ故に宇宙のあちこちで破綻し〉てきた、という。〈全知全能としか思えない存在に論理の破綻や疲弊などという現象がある〉。それが珠子の存在によって〈宇宙の論理が女性的なものに変わってきた〉という。〈単一の論理〉を持った**男性的な論理**から、〈**女性特有の倫理**が破綻に直面したこの世界を救いつつある〉(p265)という状態への変化。しかし「彼女」は「彼」を溺愛する教育ママという矛盾、というねじれた設定。

#### 3)；作品内虚構人物としての自意識というメタフィクションと、その終焉

エディプス(香川智広)のための妻として選ばれた七瀬。「彼女」の意識と入れ替わり、その強大さを思い知るに至った七瀬の非現実感、読者の日常や現実感に強くゆさぶりをかけると共に、フィクションという虚構内人物としての七瀬の非主体性や現実感の希薄さにも目を向けさせる。虚構内の人物が、そこが虚構であり自分の力の及ばない世界であると知りながら、自ら幕を降ろそうとする様子は、そのことによってかえって自意識を持った主体的な人物として立ち上がってくる、という逆説的な設定になっている。ここにはメタフィクション的な仕掛けが施されている。このことによって読者は、「さて、あなたは自らの主体性をどこに・どう見出しますか？ どう行動しますか？」と自問するように仕向けられたテキストになっている。

## ●七瀬シリーズについて

＜第一作『家族八景』は舞台が家庭である。**第二作は国家である**。第三作は神である。**全体としてみると七瀬三部作は、家庭—国家—神を主題とする筒井康隆のスキヤンダラス神学になっている**。これがはじめから意図されたものかどうかはわからない。そして第三部『エディプスの恋人』はがぜんギリシャ神話のパロディ的再生になっており、ここからふりかえると、全体はオレスティア三部作に似てくる。(略)彼女のスケールは、逆ホームドラマには収まりきらないだろうと思っていたところ、超美人に変身して『七瀬ふたたび』に転生した。**こんどは新生人類＝エスパーを抹殺せんとする特殊警察との戦闘である**。(略)彼女は念動力や時航力を持っていなくて、相手の心を読みとる感応力をもっているにすぎないということだ。それが他のエスパーたちと組みあわせられると最強の武器になる。その組みあわせかたは読まれたとおりだが、情報力が力の根源になる、という筒井康隆の認識が興味深い。(略)描写力と作品の香気だけでも『七瀬ふたたび』は第一級の文芸作品だ。＞

(「解説」平岡正明(1978)より)

## ●当時の文学研究の世界での筒井評価

＜(八十年代頃までの間)近代文学研究者の過半数は、筒井康隆を読んでいなかった。特に中高年層では、読んでいるほうが例外的だった。それはある程度予測していたことだが、問題は**なぜ“読んでいない”かという理由**だ。整理してみると、ほぼ三つのタイプに分けることができた。

まず第一のタイプはきわめて単純で、読む機会がなかったというものだ(…)。第二のタイプは、要するに“流行作家”だから読まないという、一種の自己規制のようなもので、このタイプの人々は、同じ理由で五木寛之や渡辺淳一や村上春樹も読まないのだ。そして第三のタイプは、筒井康隆の作品が**SFとかギャグとかスラプスティック**とかいった、えたいの知れない不まじめなものの寄せ集めであって、“人生いかに生きべきか”というテーマをもたない無意味なものであるらしいと予想し、その偏見によって忌避している人々のようだった。

よく考えてみるとこの三つのタイプには共通点があつて、**いずれも文学あるいは研究における“制度”というものに拘束されている**。第一のタイプはかなり無意識的な拘束と言えるが、第三のタイプともなると、まことに強固に自己の中に“制度”を構築してしまっている。つまり、近代文学研究者の多くが筒井康隆を読んでいなかったということは、**筒井康隆を“制度”内の作家として認めていない研究者がそれだけ多い**、ということの意味するらしい。

\*

社会が幻想であるという想定は、個人が幻想であるという認識を核としていた。人物は、夢や深層心理の人格的な実現として造型されており、そうした人物の相互の関係が、社会的行為を代行していた。ある面において、それは安部公房や福永武彦の試みとも通底していたけれど、ある特定の観念を容認するような不徹底なものでなはかつた。そもそも、社会とか個人とか言ったとらえ方は皆無で、**発想の根本が違っていた**。

こうした認識に基づいて、**どんな聖域も構えないという徹底したパロディやギャグ**が紡ぎ出されて

いた。小説や詩歌のパラダイムも完全に解体され、それどころか、ことばそれ自体がみごとに分解されてしまっていた。そして SF 的手法とつながる時間・空間の概念の解体もあった。

要するにそこでは、すべてのパラダイムが解体され、崩壊させられていたのだ。そしてその崩壊の底から、人間存在というものの根源的な不安と、それを包む巨大な哄笑とが湧き上がっていたのである。日本の近代文学に対する私の狭い経験の範囲内ではあるが、“文学”にはこんなことまでできるのかという畏怖に似た感覚を、初めて私は抱いた。>

(「筒井康隆・人と作品」柘植光彦(1988) より)

### ●筒井康隆の作家的影響

〈夢〉を現実と等価値のものとして物語を展開していく作風はユング・フロイトら心理学の影響を大きく受けている。『海』の編集者の埴嘉彦によって中南米文学に出会い、マルケスやリヨサ、コルタサルらの文学にふれる。この刺激は「虚人たち」成立の源となる。イーグルトンやファーコー、ジュネット、バルト、ソシュールらの理論が作品に採り入れられている。演劇・音楽との関わりは幼少時より強く、独特のリズム感など筒井文学の作風に関わる。特に自身ドラムスやクラリネットの奏者であるジャズへの関心は『ジャズ小説』などに結実している。

### ※参考文献

- ・『新研究資料 現代日本文学 第2巻』(明治書院、2000)
- ・『昭和文学全集 第29巻』(小学館、1988)
- ・『本の森の狩人』筒井康隆(岩波新書、1993)
- ・『現代批評理論のすべて』大橋洋一(新書館、2006)
- ・『小説の技巧』デイヴィッド・ロッジ(白水社)
- ・〈小説『七瀬三部作』暴かれる人間心理 最低で最高の読後感〉  
<http://reco.mayokore.org/post-569/>
- ・〈七瀬三部作「家族八景」〉  
<http://www.7se-themovie.jp/>

## 【まとめ】

筒井康隆の作品の特徴としてよく指摘されるのが、〈SF〉〈ギャグ〉〈スラップスティック〉〈グロテスクな笑い〉といったものです。これは解説にもあるとおり、個人、家族、社会的常識、通俗的な価値観、国家、神仏、などといったあらゆる対象をすべて等価に、作品執筆の対象として徹底的に解体・滑稽化してみせるだけの胆力と筆力があるからこそ、できることでもあります。また筒井は〈言葉〉や〈(人間の)思考〉といったカタチを持たないものまでも、疑ってかかります。筒井作品には安全圏というものがないのです。

このように紹介してただけでは、ピンと来ないのも無理ないかもしれません。ですから今シーズン、一緒に“七瀬三部作”を読み解いていこうと思います。第二作、第三作と併せて読むことによって、筒井作品に寄せられる評価がだんだん実感としてわかるかもしれません。けれどそれは決して、筒井作品を礼賛しましょう、ということではありません。むしろ、このような指摘を踏まえた上で、丸つきり新鮮な目でひとりひとりがそれぞれ独自に、筒井作品を鑑賞・評価してみてもどんな景色が見えてくるだろうかということに他なりません。完結編ではそのような試みしてみようと思います。

シーズンを通じて三部作を鑑賞してきたことで、現代 SF というジャンルの特質としての、

- (1)超虚構の物の見方の醍醐味
- (2)現代文明批評を基盤とする絶妙のブラックユーモア
- (3)ユニークな同時連想モノローグの文体の新鮮さ

などの点にもあらためて実感できたのではないのでしょうか(本書「解説」参照)。これらの観点は、日常生活やふつうの(つまり私たちひとりひとり)の考えのなかに、実は非常にグロテスクだったりエゴイスティックだったりする側面があることを、決して反省的ではなく、強烈な嗔いのなかで暴き立てている点にも目を向けさせることになるでしょう。

テーマ 《ヒトの心理とエゴを“読む”》

⇒ シーズン〈完〉

